



Title	アヴァンギャルド芸術家グスタフ・クルーツィス：生産主義理論とその具象 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	大武, 由紀子
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第13280号
Issue Date	2018-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/72200
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yukiko_Otake_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： 大 武 由 紀 子

審査委員 主査 教授 宇 山 智 彦
副査 准教授 安 達 大 輔
副査 教授 大 西 郁 夫
副査 名誉教授 望 月 哲 男

学位論文題名

アヴァンギャルド芸術家グスタフ・クルーツィス
—生産主義理論とその具象—

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文が取り上げるクルーツィスは、数点のポスター作品によって名前をよく知られた芸術家ではあるが、スターリン個人崇拜に加担したというイメージが強く、1970年代以降のロシア・アヴァンギャルド芸術再評価にもかかわらず、十分に研究されていない。本論文は、クルーツィスの生涯と創作に密着し、彼が有名な作品を作った時期だけでなく、マレーヴィチの弟子として修行していた時期や、社会主義リアリズム絵画を描いた時期も含めて研究することで、彼の創作の変遷を明らかにした。生産主義をはじめとする芸術理論との関係が特に重視されると同時に、各時代の政治状況・芸術界の状況も、全連邦共産党中央委員会の決議や芸術諸団体の活動にかかわる一次史料を直接参照して、詳細に述べられている。全体として、理論・描写性・芸術性、社会政治的状況という三者が重なり合うところにクルーツィスの創作活動を位置づけるという研究目的は、十分に達成されている。

特に、クルーツィスら生産主義者・構成主義者たちが、第1次5ヵ年計画の時代にスターリンのイメージメーカーとなり、全体主義プロパガンダ・マシーンの形成に関与しながら、新古典主義的な「アフル」派・社会主義リアリズムとのイデオロギー闘争に敗れた経緯と、その後も時代に適応しながら自分の理念を維持していこうとした姿を描き出したことは、重要である。従来の研究では、アヴァンギャルドをひたすら全体主義に押しつぶされる存在として描くか、逆にアヴァンギャルドと全体主義を直結させるかになりがちであったが、本論文は、モスクワ地区ソヴィエト芸術家同盟（MOSSKh）での討論会の議事録など、ロシア現地の研究者も目を向けてこなかった資料を使いながら、批判と反論・自己批判の複雑なメカニズムを描き出しており、歴史研究としても有意義なものとなっている。クルーツィスが芸術とは無関係の理由（民族主義的陰謀に参加したという冤罪）で逮捕・銃殺される前の2年間の活動について、彼が描いた絵画とパリ万博に展示したパネル画、および本人や妻の書いた文章を使って、社会主義リアリズムへの降伏と生産主義的なフォトモンタージュの維持という二面性を示す作業も、説得力をもってなされている。

ポスターなど個々の図像に関しては、図法、構成、色使い、描かれている対象、書かれているスローガンなど多方面から分析しており、細部に注目しながら大胆な解釈を施しているのが特徴である。対象に没入するあまり、やや主観的・情緒的な解釈に流れている部分もあるが、没入したからこそできる鋭い解釈が多くなされている。また、クルーツィスがさまざまな時期に接した流派の影響（特にマレーヴィチとの関係）や、自ら作り出したスタイルがそれぞれの作品の中にどう現れているか、(旧)「アフル」派などとの違いがどこにあるかも、図像に即してほぼ適切な説明がなされている。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文は、クルーツィスの創作活動の全体像を明らかにしようという熱意に満ちた、大変な力

作である。芸術と理論、政治状況、およびクルーツィスの個人史という各方面に目を配り、ヴィジュアル資料と文字資料の双方を大量に集めるといふ、多大な労力と根気を要する作業をしたうえで、クルーツィスの創作とそれを取り巻く状況について鋭い解釈を行ったことは、高く評価できる。論文筆者が特に重視している、生産主義理論とクルーツィスの作品の関係についても、労働者に寄り添う姿勢、機械による生産を思わせるような創作手法、社会主義建設の表象、アジェンダの重視といった基本的な面での対応関係は、十分に立証できている。

ただ、理論的な著作や綱領的文書の細部と作品との関係については必ずしも綿密に実証できておらず、特にアルヴァートフの『社会学的詩学』の1ヵ所に出てくる言葉を文脈から切り離して、生産主義の理論と創作、さらには共産党の基本路線との関係を示すキーワードとして使ったことは、議論に混乱を生んでいる。生産主義が唱えた芸術家と労働者の協働関係についても、基本的な理解は誤っていないものの、時に認識や用語の混乱が見られる。図像の解釈にも、権力への「抵抗」の意図を過剰に読み取ろうとするなど、行き過ぎた箇所がある。しかし、こうした行き過ぎや細部の誤りは、芸術と理論と政治の関係について本論文が描いた全体的な構図を崩すものではなく、クルーツィスの活動と作品に関する鋭い考察は、部分的な欠点を補って余りあるものである。

以上のように、本論文がクルーツィス研究として画期的であると同時に、ロシア・アヴァンギャルド史、スターリン時代芸術史の研究に大きな貢献をなしていることを評価して、審査委員会は全員一致で、本論文提出者が博士(学術)の学位を授与されるにふさわしいとの結論に達した。